

# 大学生の手縫い技能定着に向けた意識調査と実技指導の実践研究

——教員養成課程における ICT 活用の試み——

馬場 彩果

植草学園大学発達教育学部

小学校教員を志望する学生たちが受けてきた家庭科の授業にまつわる意識調査を行い、手縫いの技能が定着することをめざした授業実践を試みた。80%を超える学生が家庭科を好きな教科と答えた。しかし布を用いた製作に限定すると、好きと回答したのは60%弱となった。また、小学校学習指導要領家庭編に示されている手縫いのうち、本返し縫いと半返し縫いについては約70%の学生が名称または縫い方の理解ができず、かがり縫いに関しては名称と縫い方のどちらも理解していない学生もいることが判明した。

実技指導においては一斉指導での実物投影機による ICT 活用が奏功した。個別指導も含め、実践により手縫いの技能が向上したことが提出物と事後アンケートから確認できた。実技には学生自作の練習布を使用した。線上を縫い進めると任意の図柄が完成する練習布により意欲的に取り組むことができたが、児童向けの適切な教材とするには見直しが必要である。

キーワード：教員養成課程、手縫い技能、実技指導、ICT 活用、練習布

## 1. はじめに

小学校教員を志す大学生に開講している家庭科関連科目を担当していると、基礎的な手縫いの実技の指示が一度で伝わらなかったり、針に糸を通せない時に糸を斜めに切るとか糸通しを使用するなどの対処法も知らなかったりすることがある。小学校から積み上げてきたはずの手縫いの技能が十分に定着していないと感じ、このまま教員となり現場に立つと児童に指導する場面で迷いが生じるのではないかとこの危惧が考えられる。そこで筆者は、手縫い技能の向上のための授業実践を試みている。これまで5分間の運針（なみ縫い）とその記録および自己評価を毎授業で実施した結果、学生が縫う距離は初回からおよそ3.8倍に伸びるなど一定の成果があり、学生自身も自信や意欲の向上を実感したことなどを報告してきた<sup>1)</sup>。学生の手縫い技能の状況については雙田も、「基礎縫いの実習は、小学校以来何回も学習した

内容であり、大学生になり生活経験も増えたことから、技術の定着が期待される場所であるが、実際には布の持ち方、糸の扱い方から指導しなければならない学生が年々増えている」と問題提起しており<sup>2)</sup>、近年の学生に共通する課題であるとも考えられる。山田らは、教員養成大学の学生にとって手縫い技能の定着は将来の児童生徒に対する指導に必要であるとし、学生の技術がどこまで定着しているかを把握し、正しい方法を身に付けさせることは非常に重要であると述べている<sup>3)</sup>。しかしながら、教員養成課程に在籍する学生の基礎縫いの技能に関する実態研究は数少ないことも森島らによって報告されている<sup>4)</sup>。

本研究では、学生がこれまでどのように家庭科を学びどのような意識をもっているかなど、彼らの背景にも焦点を当てながら手縫いに関する実情を捉え、技能の定着をめざす実技指導の実践を行った。なお、本研究で扱う手縫いの種類は、平成29年告示小学校学習指導要領家庭編「B 衣食住」(4) 衣服の着用と手入れ、

(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作<sup>5)</sup>に記載のある、なみ縫い、返し縫い(本返し縫い、半返し縫い)、かがり縫い、ボタン付け、玉結び、玉どめとした。

研究対象者は、本学の平成30年前期開講「初等家庭科教育通論(全15回)」受講生26名とした。学生の内訳は1年生20名、2年生4名、4年生2名で、男子学生7名、女子学生19名である。

## 2. 方法

### 2.1 事前事後アンケート調査

質問紙を用い、事前と事後にアンケート調査を行い分析した。対象者26人全員に配布し回収率は100%であった。質問紙の内容は以下の通りである。なお、事前アンケートの際には、設問6で技法の名称と実際の縫い方が結びついていない学生がいることを想定し、回答直前にDVD教材で正しい縫い方を視聴させている。

＜事前アンケート＞

【設問1】家庭科が好きですか。①「はい」か②「いいえ」のどちらかに○をつけてください。

【設問2】小学校時代の印象深い家庭科の授業内容と、その時感じたことを記述してください。

【設問3】(1) 日常生活で針と糸を使うことはありますか。①～④の中であてはまるもの一つに○をつけてください。①よくある。②ときどきある。③ほとんどない。④ない。

(2) (1)で「よくある」もしくは「ときどきある」を選択した人に聞きます。針と糸を使うのはどのような時かを記述してください。

【設問4】(1) 家庭科の授業で、布を用いた製作(裁縫)をするのは好きでしたか。①～④の中であてはまるもの一つに○をつけてください。①とても好きだった。②どちらかというと好きだった。③あまり好きではなかった。④好きではなかった。

(2) (1)のように答えた理由を記述してください。

【設問5】家庭科の授業で、布を用いた製作(裁縫)の時に困ったことがあった場合、どのように解決したかを記述してください。

【設問6】次の基礎的な手縫い(なみ縫い、本返し縫い、半返し縫い、かがり縫い、ボタン付け、玉結び、玉どめ)について、①～④の中であてはまるもの

の一つに○をつけてください。①名称も知っているし、正しく行うこともできる。②名称は知っているが、やり方は知らない。③名称は知らないが、やり方は知っている。④名称もやり方も知らない。

＜事後アンケート＞

【設問1】(1) 次の基礎的な手縫い(なみ縫い、本返し縫い、半返し縫い、かがり縫い、ボタン付け、玉結び、玉どめ)について、本日の講義までで正しく理解できましたか。もしくは上達できたと思いますか。①～④の中であてはまるもの一つに○をつけてください。①よく理解した／とても上達した。②だいたい理解できた／やや上達した。③あまり理解できなかった／あまり上達しなかった。④ほとんど理解できなかった／まったく上達しなかった。

(2) (1)のように答えた理由を記述してください。

【設問2】(1) 本科目では手縫いについてのDVD教材や実物投影機、写真などを使用しました。これらは手縫いが上達するために有効であると感じましたか。①～④の中であてはまるもの一つに○をつけてください。①とても有効である。②やや有効である。③あまり有効でない。④有効でない。

(2) (1)のように答えた理由を記述してください。

### 2.2 ICTと練習布を使用した実技指導と評価

DVD教材と実物投影機を用いて手縫いの方法を一斉指導したのちに、机間巡視にて個別指導を行い、学生の様子や縫い目などを検討した。授業は平成30年6月21日と28日の2回にわたって行った。

実技には、学生自身が教材として考案した練習布を使用した。前時に「小学校家庭科での初めての手縫いにふさわしい練習布作り」との課題を提示し、たて20センチ、よこ25センチ、綿100%のシーチング生地を図柄や指示文を書き込ませた。練習布製作の条件として、先述の7つの手縫い技法と名前の縫い取りを入れること、直線縫いを基本とすること、男女関係なく児童が意欲的に取り組める教材に仕上げることの3つを伝えた。

## 3. 結果

### 3.1 アンケートの集計結果

#### 3.1.1 事前アンケート

事前アンケートの結果は以下のものであった。

【設問1】①21名(80.8%), ②5名(19.2%)

【設問2】調理実習15名(57.7%), 布を用いた製作10名(38.5%), 栄養素1名(3.8%)

感じたこと：家でも料理をするようになった(3名), 子どもだけで料理をするのは初めてだったので達成感があった(2名), レシピを見ながら協力して作ったのがとても楽しかった(2名), おいしく作れて嬉しかった(2名), 初めて一人で最初から最後まで調理して, 大変なことだと母に感謝した記憶がある, 野菜の切り方がたくさんあると知り興味をもった, トートバッグ作りは苦労したが達成感があった(2名), エプロン製作を通し自分で物を作る楽しさを感じた, エプロン作りは難しかったが作った物を実際に使うことができて嬉しかった, ミシンを使うとあっという間に縫えて感動した思い出がある, ミシンが楽しくて家でもやった, ボタンがうまくつけられず良い思い出がない, ミシンが難しかった, ミシンが怖かった, ミシンを2台壊してから家庭科への苦手意識がある, 裁縫は初めてで難しかった ※無回答あり

【設問3】(1) ①0名, ②7名(26.9%), ③11名(42.3%), ④8名(30.8%)

(2) ズボンや靴下に穴が開いた時(5名), ボタンがゆるくなったり取れたりした時(4名), 服がほつれた時(2名) ※複数回答あり

【設問4】(1) ①7名(26.9%), ②8名(30.8%), ③8名(30.8%), ④3名(11.5%)

(2) ①もしくは②を選択した学生：集中できて心が落ち着くから(3名), ミシンが好きだったから(2名), 縫うことが好きだから(2名), 物を作ることが好きだったから(2名), 手作りで物が完成するのが嬉しかったから(2名), 実技は楽しいから(2名), 順序通り丁寧にやっていると完成するから ※無回答, 複数回答あり

③もしくは④を選択した学生：縫うことが苦手だから(5名), 難しいから(2名), 針の先端が怖かったから, うまく縫えないから, 針が刺さると痛いから, 手先が不器用だから, やらされている感じがあったし, あまり使える物ができないから, 作業が遅くて期日までに終わらなかったから ※無回答, 複数回答あり

【設問5】縫い方がわからない時に友人が教えてく

れた, 玉どめができない時に先生が個別に教えてくれてできるようになった, 玉結びがわからない時に先生が教えてくれた(2名), 玉結びができない時に友だちに教えてもらった(2名), 玉どめやかがり縫いがうまくできない時に動画を見たり友人に教えてもらったりした, 返し縫いがわからない時に周りの友だちに教えてもらった, ミシンの使い方がわからない時に先生が教えてくれた(7名), ミシンを動かさない時に友人に教えてもらった(3名), うまく縫えなくて困っていたが先生はたくさん子どもに指導していたので聞けず, 結局家で親に教えてもらった ※無回答あり

【設問6】なみ縫い：①24名(92.3%), ②1名(3.8%), ③1名(3.8%), ④0名

本返し縫い：①8名(30.8%), ②16名(61.5%), ③2名(7.7%), ④0名

半返し縫い：①8名(30.8%), ②16名(61.5%), ③2名(7.7%), ④0名

かがり縫い：①15名(57.7%), ②6名(23.1%), ③4名(15.4%), ④1名(3.8%)

ボタン付け：①18名(69.2%), ②6名(23.1%), ③2名(7.7%), ④0名

玉結び：①22名(84.6%), ②2名(7.7%), ③2名(7.7%), ④0名

玉どめ：①22名(84.6%), ②2名(7.7%), ③2名(7.7%), ④0名

### 3.1.2 事後アンケートの集計結果

事後アンケートの結果は以下のものであった。

【設問1】(1) なみ縫い：①22名(84.6%), ②3名(11.5%), ③1名(3.8%), ④0名

本返し縫い：①14名(53.8%), ②11名(42.3%), ③1名(3.8%), ④0名

半返し縫い：①15名(57.7%), ②10名(38.5%), ③1名(3.8%), ④0名

かがり縫い：①17名(65.4%), ②7名(26.9%), ③2名(7.7%), ④0名

ボタン付け：①19名(73.1%), ②5名(19.2%), ③2名(7.7%), ④0名

玉結び：①20名(76.9%), ②5名(19.2%), ③1名(3.8%), ④0名

玉どめ：①20名(76.9%), ②5名(19.2%), ③



1名 (3.8%), ④0名

(2) スクリーン (プロジェクター) で見本を見ながらやったら理解できたから (2名), 本返し縫いと半返し縫いはプロジェクターを使ってわかりやすく説明してもらえたから (2名), 先生の説明が丁寧だったから, 元々の知識にプラスされたから, なみ縫いは一番上達できたから, 何度も縫って上達したから, 自分で練習布を作ることによって縫い方が定着しやすかった, 理解できて自分だけでできるようになったから, 本返し縫いは先生の説明を聞きながらでないとできないから, 玉どめはだんだんコツをつかんだ, かがり縫いはまだ上達していない, 授業を受けて理解できたから, 自分の練習布のおかげでできた, 縫い物をしないからわからない, やり方が曖昧だったが確信をもって理解することができた, むかし家庭科でやっていた時よりもきれいに縫えているから, 実際に縫ってみることで理解できた ※無回答, 複数回答あり

【設問2】(1) ①24名 (92.3%), ②2名 (7.7%), ③0名, ④0名

(2) 映像があるとわかりやすいから (10名), 実物投影機で手本を示してくれると理解が深まった (4名), イメージしやすい (3名), 文字や言葉より映像からの情報の方が理解できる (3名), わかりやすく楽しく学べたから, 大事なところを覚えやすい, わかりやすいポイントを教えてくれたから ※無回答, 複数回答あり

### 3.2 手縫い実技の授業

まずは一斉授業で各技法の縫い方を模範し, 実物投影機で拡大提示した (写真1)。学生も自身で製作した練習布と針, 糸を用意し, 説明を聞きながら練習布の線上を実際に縫わせた。繰り返し模範を示し, 理解できた学生から各自で縫い進めるよう指示した。模範中には学生から多くの発言があった。特に本返し縫いと半返し縫いを拡大提示した際には, 「そうやるのか」, 「初めて理解できた」, 「針が進む方向がまだわかりません」, 「布の裏面はどのような縫い目なのかを見せてください」, 「もう一度やってください」と盛んに発言があり, 疑問を共有しながら習得をめざす授業の雰囲気が高まった。

その後は各自の実技の時間とし, 個別指導にあ

たった。筆者の説明を見聞きした時点では理解した様子であっても, 実際に一人でやってみると玉結びが絡まってしまうとか, 糸こきが足りないなどのつまずきに直面している学生もいた。机間巡視中に最も多く受けたのは, 本返し縫いと半返し縫いとかがり縫いの針を刺す方向がわからないという質問であった。その際には学生の前で個別に模範を見せたり, 学生の練習布に指をさしながらガイドしたりして指導することで理解が進んだ。

授業時間内に縫い終わらなかった一部学生には残りを宿題とし, 完成した練習布は感想文とともに提出させた。



写真1 実物投影機を使用した実技指導の場面

## 4. 考察

### 4.1 家庭科の経験にまつわる意識

アンケートから, 学生の約80%が家庭科を好きな教科と位置付けていることが示された。小学校時代の家庭科の印象的な授業に調理実習を挙げた学生が最も多く, 次に布を用いた製作, 最後に栄養素が挙げられた。昨年度の受講生にも同様の質問をしたが調理実習にのみ集中していたので, 今回わずかに内容が広がった。それらの授業についての感想から, 実習形式の授業は良くも悪くも印象深く心に残っていることが確かめられた。

また, 約70%の学生が日常的に針と糸を使うことが「ほとんどない」か「ない」を選択していた結果から, 裁縫が普段の生活から離れた存在になっていると推察される。残り約30%の「ときどきある」を選択した学生は全員, 修繕が目的であった。その

反面、布を用いた製作自体は60%弱が「とても好き」か「どちらかというと好き」と感じていた。その理由からは、日常生活で裁縫をする機会はほぼないが、授業において製作することに楽しさを感じたり、製作過程で集中力等を養ったり、物が完成するプロセスを知り、作り上げる達成感を味わったりしていることが示された。これは暮らしの中で裁縫の必要性が薄れてきた現代においても、家庭科教育で布を用いた製作を扱う意義といえる。

しかし、異なる見方をすると、家庭科が好きとの回答は全体の約80%であるにも関わらず、布を用いた製作に限定すると好きとの回答は60%弱に下がっているのである。苦手意識が解消されないままであることにより家庭科嫌いになったり、家庭科は好きでも布を用いた製作は好きでないという意識につながったりしているようである。

学生にはこれまで、ミシンや玉結び、玉どめ、返し縫い、かがり縫いの実技においてやり方がわからないなどの困難に直面した経験があった。その際、60%以上の学生は教師に個別指導を受けて解決し、残りは周りの友人に尋ねるか動画を見て納得したようである。しかし、多数の児童を指導する教師に質問ができずに家庭で解決をはかった学生もいた。教材選定を含め実技指導のあり方については常に教育課題となっているが、改めてその必要性を考えさせられる実態が把握できた。

## 4.2 ICTを活用した実技指導の効果

裁縫は手先の細かい動きであり、授業において教師が一斉指導で模範を示すことには困難さを抱える。そこで有効となるのがプロジェクターを使用した映像や写真の視聴、実物投影機での手元の拡大提示といったICTの活用である。家庭科教育でもICT活用の動きは活発になりつつあり、伊藤らは家庭科実習における効果として、科学的なプロセスの視覚的理解により、知識・理解、技能・技術の獲得に貢献できることや、技能・技術の繰り返し再生により一斉授業を助け、今までの個別指導の時間を大幅に減らすことができることなど5点を挙げている<sup>6)</sup>。

本研究でも実物投影機やDVD教材を使用した。実物投影機については、全体に向けて説明しながら何度も見せることができるうえ、学生の発言を拾い

ながら即座に見せる角度や拡大率を変えることが可能であった。学生が各々抱えていた細かな疑問を机間巡視や個別指導を行うことなく解消でき、疑問を共有することもできた。

学生の反応も大きく、事後アンケートでは全員がICTの有効性を感じたという調査結果が示され、ICTを活用した本研究での実践が手縫いの技能定着に向けて効果的に作用したと判断できる。

しかし、一人ひとりの技能を判断し定着をめざすには一斉授業だけでは不十分であり、個別指導が非常に重要であることを改めて把握した。机間巡視をすることにより、大きかった縫い目が次第に小さくなるなど、学生の取り組む姿勢や過程を間近に見ることができた。難関であった本返し縫いと半返し縫いも、授業の最後には全学生が正しい縫い方になっていた。提出された練習布は、事前アンケートで認識の差があったようには見取れないほどの完成度であった。進捗や細かな出来栄にはまだ差があるものの、正しい縫い方ができるようになり、着実に技能向上に近づいたものと考えられる。このような結果が見られたのは、ICTを活用して基礎的な指導を一斉に行えたことにより、その後の学生の様子をよく観察したり発展的な個別指導をする時間が取れたりしたことも一因であると考察した。

## 4.3 手縫い技能の自己評価の状況

実践の前後における手縫い技能に関連する自己評価の全体像を視覚的に捉えるべく図1を作成した。これは前章で報告した事前アンケート設問6と事後アンケート設問1の結果を人数でまとめたものである。

	事前				事後			
	名称も知っているし、正しく行っている	名称は知っているが、やり方は知らない	名称は知らないが、やり方は知っている	名称も知らない	よく理解できた/とても上達した	だいたい理解できた/やや上達した	あまり理解できなかった/あまり上達しなかった	ほとんど理解できなかった/まったく上達しなかった
なみ縫い	24	1	1	0	22	3	1	0
本返し縫い	8	16	2	0	14	11	1	0
半返し縫い	8	16	2	0	15	10	1	0
かがり縫い	15	6	4	1	17	7	2	0
ボタン付け	18	6	2	0	19	5	2	0
玉結び	22	2	2	0	20	5	1	0
玉どめ	22	2	2	0	20	5	1	0

単位：名

図1 各技法に対する事前事後の意識

#### 4.3.1 事前の自己評価

実技の機会が多いなみ縫いは、全体の90%にあたる24名が身に付いていると答え、最も高い自己評価が示された。玉結び、玉どめ、ボタン付けがそれに続いた。反対に、突出して理解度が低いのが本返し縫いと半返し縫いであった。名称と正しい縫い方が身に付いていると認識しているのはどちらもわずか30%にあたる8名で、全体の半数以上が名称のみの知識しかない状況であった。宇野らの調査においても大学生の約半数が本返し縫いと半返し縫いを習っていない、もしくは覚えていないと回答したことを受け、技能定着の曖昧さが指摘されているが<sup>7)</sup>、本研究もこれに近い数値となった。かがり縫いについては他に比べて名称の定着が弱く、また唯一「名称もやり方も知らない」が選択されていた。授業で扱った回数や実践量が定着度に結びついていることが推察できるが、「学生は自己評価の高さに比べて、実際の技能習得は不十分である」との小林らの研究<sup>8)</sup>もあることから、実技において学生の様子を注意深く観察し、指導していく必要がある。

#### 4.3.2 事後の自己評価

実技後はすべての技法で「よく理解できた／とても上達した」が多く選択された。技法別で見ると、なみ縫いが最多であった。なみ縫いは事前アンケートで自己評価の最も高かった技法であるが、実技によりさらに理解が深まり上達したと実感したようである。つまりきの多かった本返し縫いと半返し縫いの選択数は他に比べて少ないものの、半数以上が選択したと読み取れる。「よく理解できた／とても上達した」と「だいたい理解できた／やや上達した」を合わせた選択数は、すべての技法において全体の90%を超えていた。また、まったく上達を感じなかった学生はいなかった。このように回答した理由からも、実物投影機を使用した実技指導が技能向上につながったことを察することができた。

しかし中には上達が明確に感じられなかった学生もあり、学生の技能定着への不安は完全には解消されていないことも明らかとなった。

図1を見ると、事前と事後で集計結果が近似しているようであるが、アンケートの設問内容は一致していないため二つを単純に比較検討することは困難

であった。今後は事前と事後でより精度の高い比較分析が行えるようアンケート内容を十分に吟味する必要がある。

#### 4.4 学生自作の練習布

本研究では教材作りも兼ねて前時までに練習布を製作し、下描きした図柄に沿って各技法を縫った。その図案に着目すると、最も多かったのは木や花、星などの自然風景が8点、次いで魚やネコなどの動物が7点、乗り物が3点、食べ物が2点、ロボット、顔、サイコロ、文字、家、服が各1点であった。どれも直線縫いを基本とし、男女で好みは偏らない図柄であり、ボタンを木の実や虫、目や鼻などに見立てる工夫があった。

作品とともに提出された感想文の中には、自作の練習布を使用したことについて、「やりながら徐々に技術が上達していったことを実感した」、「製作している時はとても楽しく、無事完成した時はかなりの達成感がありました」、「お絵かきのような感覚でできた」、「小学生の時の練習布はおもしろいものではなかったので、自分で考えたデザインであれば楽しいと思った」などと記述されていた。意欲的に取り組めて達成感や技能向上を実感することはできたが、図柄により練習量や難易度が異なったことは大きな課題である。また、図柄を考案するだけでなく練習布に説明文やイラスト、縫う順番や縫い方のコツを書き入れたり、進度が速い児童にチャレンジコーナーを用意したりするなどした学生（写真2参照）と、それらがなかった学生とがおおよそ半数ずつ存在した。「教材に仕上げる」という条件は達成できたとはいえないので、今後は児童を意識した教材作りの面でも十分な指導を行いたい。手縫いやミシン縫いの練習布の開発は松井や西村<sup>9)</sup>、加藤や佐藤<sup>10) 11)</sup>により行われているもののその数は非常に少なく、教員養成課程の学生が行ったものはほとんどない。新たな研究分野としても検討を進めたい。

#### 5. おわりに

調査により、本返し縫いと半返し縫いの名称と縫い方を正しく理解していると自己評価した学生は約30%であり、基礎的な手縫いの技能が定着している



とは言えない状態であることが明らかになった。

実技指導においては実物投影機を中心としたICTを活用した。筆者の手元を拡大提示することにより学生の声の拾いながら角度や拡大率を変えて何度も見せることができ、同時に複数名の学生の理解につなげることができた。その効果は学生も実感しており、扱ったすべての技法において技能の上達があったことが示された。

また、実技には学生自身が考案した図柄の練習布を使用した。意欲的に取り組める工夫があったが、

練習量や難易度には個人差があったため、児童が実際に使用する教材とするための条件を見直しその効果を検証したい。

## 6. 倫理的配慮

アンケートや写真は研究にのみ使用することの承諾を得ている。また、使用したデータから個人が特定されないよう、写真の一部を加工した。

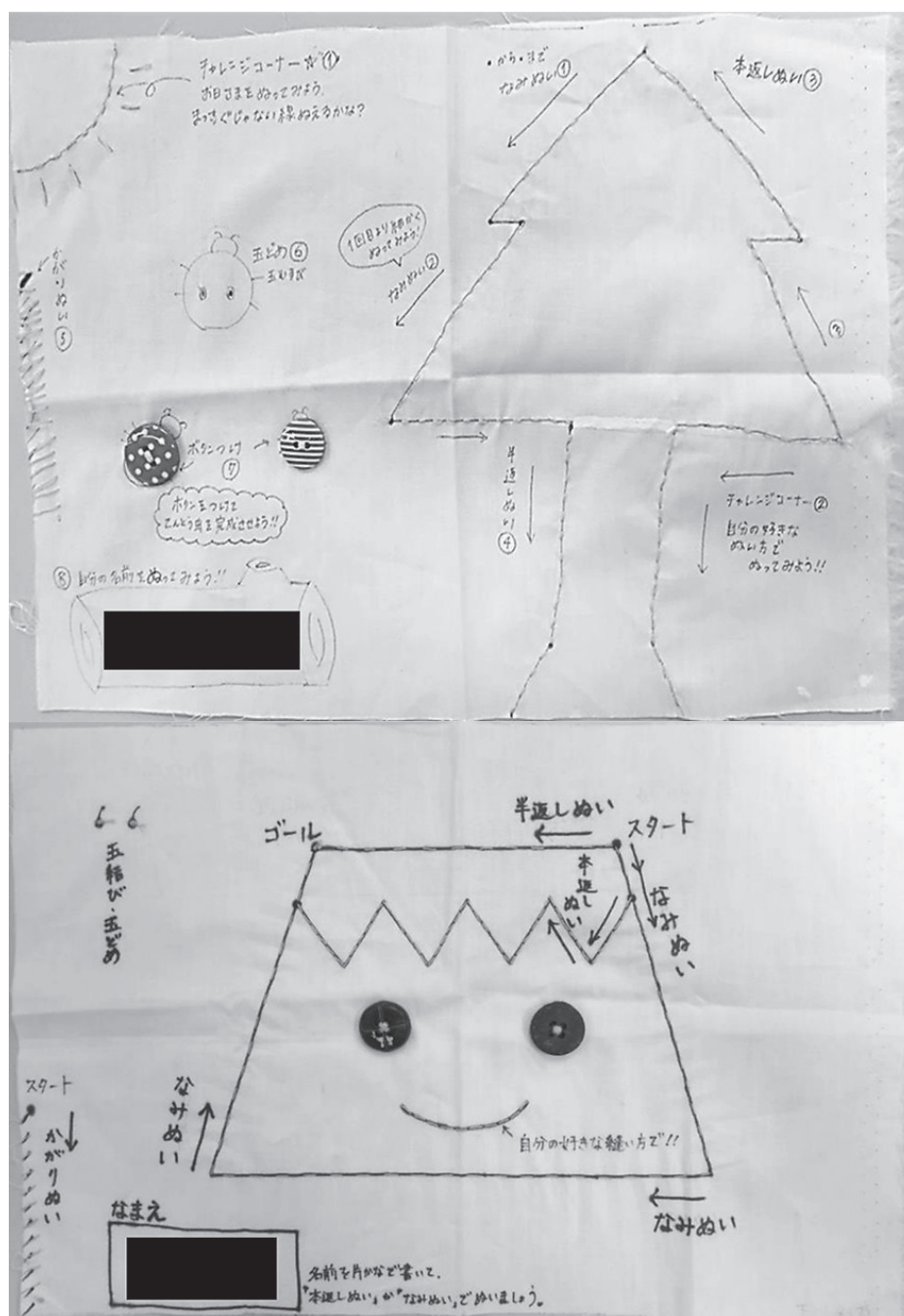


写真2 学生が製作した練習布2点

文献

- 1) 馬場彩果. 教員養成課程における学生の手縫い技能向上に関する実践的研究. 植草学園大学研究紀要. 2018 ; 10 : 105-112
- 2) 雙田珠己. 大学生の基礎縫い技術の現状と課題—小学校教員免許取得希望者の場合—. 熊本大学教育実践研究. 2012 ; 29 : 69-75
- 3) 山田由佳子, 尾藤真智子. 大学生における手縫い技術の実態—玉結びと玉どめに着目して—. 大阪教育大学家政研究会生活文化研究. 2017 ; 54 : 53-62
- 4) 森島美佳, 三野たまき. 教員養成課程大学生の並縫い技能の分析—小学校「家庭」の布を用いた製作における学習指導に向けて—. 金沢大学人間社会研究域学校教育紀要. 2018 ; 10 : 75-80
- 5) 文部科学省. 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説家庭編. 東洋館出版社. 2018
- 6) 松尾七重, 樋口咲子, 本多佐保美, 小橋暁子, 伊藤葉子, 中山節子, 木下龍, 辻耕治. 教科指導における ICT 活用の具体化—実技教科の特徴を生かして—. 千葉大学教育学部研究紀要. 2017 ; 66(1) : 161-168
- 7) 宇野妙恵, 雙田珠己. 初めて手縫いを学ぶ小学生に向けた指導方法の考察—大学生の知識・技能の実態分析から—. 熊本大学教育学部紀要. 2017 ; 66 : 347-354
- 8) 小林久美, 柳昌子. 小学校教員養成科目としての家庭科の課題（2）—衣の技能に関する実技調査を通して—. 九州女子大学紀要人文・社会科学編. 2008 ; 44(3) : 17-29
- 9) 松井真理, 西村綏子. 児童のミシン縫い指導の試み（第 2 報）—児童用ミシン縫い練習布の教材開発—. 日本家庭科教育学会誌. 1992 ; 35(1) : 73-76
- 10) 加藤祥子, 佐藤初美. 学習教材の開発 1—手縫いの練習布—. 愛知教育大学研究報告芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編. 2015 ; 64 : 51-56
- 11) 加藤祥子, 佐藤初美. 学習教材の開発 2—ミシン縫いの練習布—. 愛知教育大学教育創造開発機構紀要. 2015 ; 5 : 93-101



## Abstract

### **Practical Report on Survey of University Students' Feelings towards Establishing Hand-stitching Skills, as well as on the Teaching of Skills: Trial ICT Use in Teacher Training Course**

Ayaka BABA

Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The objective of this report was a survey of the feelings that university students in elementary school teacher training course held toward past experiences of home economics classes, and the conduct of classes for establishing students' skills in hand-stitching. From the results, it was determined that over 80% of students liked home economics, and retained pleasant memories of cooking or sewing practice. However, when asked if they liked only sewing classes, less than 60% answered in the affirmative. Additionally, the survey found that only 30% students could back stitch and half-back stitch or knew the names of these stitches, while some students not only could not sew overcast but also lacked knowledge of the name. In this survey results showed that it is difficult to have well-established basic hand-stitching skills.

An opaque projector which could show a magnified image of the instructor's fingertips at various stages was used to teach students how to sew. Afterward, the instructor taught individual students while walking around the class. Survey results showed that with these practical approaches, students' skills in hand-stitching improved. In addition, enthusiasm for sewing improved by having students make a practice cloth. They tried various designs for use at elementary schools.

**Keywords:** teacher training course, skill in hand-stitch, teaching skill practice, use of ICT, practice cloth

